

# 文化と社会に力を与える「星空案内」の環境についての一考察

——フィリピン・ネグロス島での実践の振り返りから——

## A Case Study on the Environment for Star Guide to Influence Culture and Society

——Through Reflection on Practice at Negros Island, the Philippines——

上之山 幸 代

Sachiyo UENOYAMA

(和歌山大学大学院教育学研究科)

富 田 晃 彦

Akihiko TOMITA

(和歌山大学教職大学院)

鷺 坂 奏 絵

Kanae SAGISAKA

(和歌山大学大学院教育学研究科)

2019年10月15日受理

### 要約

星を見るなどの天文に関する活動において、人々に広い視野を与え、個人の生き方や人間の在り方を考えるきっかけを作るようになるには、どのような環境が大切なのか、フィリピン・ネグロス島での体験をもとに考察した。その実践において、人々に広い視野を与え、個人の生き方や人間の在り方を考えることにつながるような事例を挙げ、その事例が成立した環境の条件を考察することを通して、7つの条件を見出した。

**Key words**：天文教育、フィリピン・ネグロス島、星のソムリエ®、アルパ奏者、学校心理士

### 1 はじめに

天文は人類にどのように貢献できるのか。国際天文連合(IAU)「戦略計画2020-2030(2018年8月)」によると、12の方向性が示されている。大きくは3方面「技術と能力」「科学と研究」「文化と社会」であり、それぞれに4項目が示されている。「文化と社会」については、「人類学」「哲学」「インスピレーション」「教育」である。人々に広い視野を与え、個人の生き方や人間の在り方を考えるきっかけを作ることができることも、天文が持つ力である。

- ・自然のすばらしさを感じ、畏敬の念を抱いたり、自分も自然の一部であることを思考したりする。
- ・人類共通の遺産のすばらしさを知ること、国際親善力を強める。
- ・時空を超えたような環境の中で命について考え、自分がどうありたいのか、また、人類はどうあるべきなのか、どこへ向うのかを探る。

といったことが挙げられる。この論文は、人々に広い視野を与え、個人の生き方や人間の在り方を考えるきっかけを作るようになるには、どのような環境が大切なのか、2019年8月にフィリピンで行った実践を振り返る中で検討したものである。

その実践において、人々が広い視野を持つことや生き方や在り方を考えることにつながるような事例を挙げ、その事例が成立した環境の条件を考察することでその環境について検討するという方法を採用した。以下、第2章で実践そのものについて、第3章で印象的な事例について、第4章でその事例が成立する環境について述べる。

### 2 実践

本章では、実践の場所、日程、参加者、実践者、実践者の役割、そして、活動内容を記す。



図1 Detiの庭と、庭から見える海

### 場所

フィリピン・ネグロス島、日本からの英語留学のための施設「Deti」。現地の人々や文化、価値観との出会いの中で英語を身につけていくことを目的とした滞在型の学校。

**日程**

2019年8月5日～8月16日の12日間

**参加者**

日本からの親子留学中の生徒(大人5名、子ども7名)、フィリピン人英語教師(約20名)、日本人旅行者(数名)、日本人スタッフとその家族(6名)、インターン中の日本の学生・社会人(7名)など。

**実践者**

上之山幸代

**実践者の役割**…括弧内は資格や実績、経験

- ①星空案内人(星のソムリエ®)
- ②アルパ奏者(現職、国内外で公演)
- ③心理カウンセラー(学校心理士)
- ④油絵アーティスト(個展開催など)
- ⑤朗読者(ラジオ情報番組・芝居・司会など)

**実践内容**

- ①天文案内人として「星のお話&観望会」を開催。以後毎日、適宜、レクチャーや観望会。
- ②アルパ奏者としてアルパ(南米生まれのハーブ)コンサート。「星座とアルパのお話」「ナイトプールで星を見ながらコンサート」「自己啓発&ヒーリングミュージック」「お盆の音楽儀式」など。
- ③心理カウンセラーとして、生き方を見つめるカードセッションを一人につき40分～80分を行う。
- ④絵画アーティストとして壁画制作。Detiの敷地内のチャイルドハウスの壁に壁画を描く。
- ⑤絵本朗読者として、自身の作った絵本の挿絵をプロジェクターで投影して朗読、また、現地のライア奏者のBGMで反戦の絵本を朗読する。

**3 実践中の印象的24事例**

本章では、時系列に沿って活動をまとめ、人々に広い視野を与え生き方や在り方を考えるきっかけとなるような印象的な24事例を「エピソード①～②④」とし、以下の項目でまとめる。

- ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)
- ◆参加者の反応(実践者の観察から)
- ◆実践者としての手応え

2019年8月7日(水)

Deti内のチャイルドハウス(子どもたちが学ぶ建物で、「アルパ演奏&絵本朗読会(50分間)」を行った。参加者は約35名。アルパと星座のお話では、ハーブも星座もメソポタミア時代の人々が考案したものであることを伝え、昔に思いをはせながら星座をイメージした曲を演奏。また、上之山作の絵本「アンデルシアのつ

ばさ屋さん」を朗読(BGMはアルパのCD)し、一人ひとりの願いを手のひらサイズの羽根に書き、それらを集めて大きな翼を作るワークショップも行った。お互いの夢を知り共同作業することで、一緒に生きている感じを味わうことも目的の一つであった。ハーブと星座の歴史を伝えた意図は、古代より人類は天体や音楽と共に生きてきたことを考えるきっかけを作ることである。



図2 参加者全員の願いが書かれた翼

Detiの副校長(Deti開設者の息子)からは、次のような挨拶があった。「Deti開設者である私の母とここにいる上之山さんは、同じ時期に本を出版し、ある新聞で二人が同時に紹介されたことがきっかけで友達になりました。母は今年の2月にフィリピンで亡くなりました。母は上之山さんにアルパを習っていたので、Detiで演奏してもらう構想を描いていました。」そして、それぞれの著書「おっと、その夢、かなえなきゃ(高橋きよみ著)」と「セルフ・セラピーな心(上之山幸代著)」が紹介された。翌日の「星のお話&観望会」開催の前に、参加者が実践者を受け入れお互いに心を開き合うという意味においても意義ある時間となった。

2019年8月8日(木)

「星のお話&amp;観望会」当日

「星のお話&観望会」が開催された。参加者は留学中の親子、インターン、スタッフ計20名。全員が毎日利用している食堂で行う。星のお話(30分間)では、「天文ソフトStellarium(以後、Stellariumと記す)」の星空映像をプロジェクターで食堂の壁に映し出して解説したり、「上之山オリジナル星座の絵」を使って星座解説したりした。星のお話のあとは、全員で庭に出て、曇り空の中、観望会を10分間行う。

Stellariumでは、まず2019年8月8日20時のネグロス島から見える空を映し出して、「月の満ち欠け・太陽の通り道・木星と土星・さそり座・夏の大三角・北極



星の高度の違い」を解説し、クイズも2問出題した。



図3 実践者の解説に聞き入る子どもたち

#### エピソード①

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

大人も子ども入り混じった20名で、Stellariumを使って月の様子を見ている時

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

「次の満月はいつでしょうか」の3択クイズに、わざと不正解したスタッフを除き全員正解して、みんなが笑顔になる。「本当に8月15日が満月になるの？決まってるの？」と、正解したにもかかわらず質問する6歳児A君に、和やかな雰囲気。スクリーンに満月の表面の様子が映し出された時、「うわあ~~~~、ウサギがいる」とA君。「カニがいると思っている人もいるんだよ」と5歳児B君。クレーターとは何かを説明したり、日ごとに太っていく月の様子や、月の出から入りまでの通り道をStellariumで確認したりした。「今いるところが北緯9度なので、月や太陽が空の高いところを通ります」の解説を大人が熱心に聞き入った。

##### ◆実践者としての手応え

子どもも大人も一緒になって楽しめている。緯度の違う場所にいることで何がどう違うのかを知るきっかけになっている。知ることで次の疑問が生まれる。

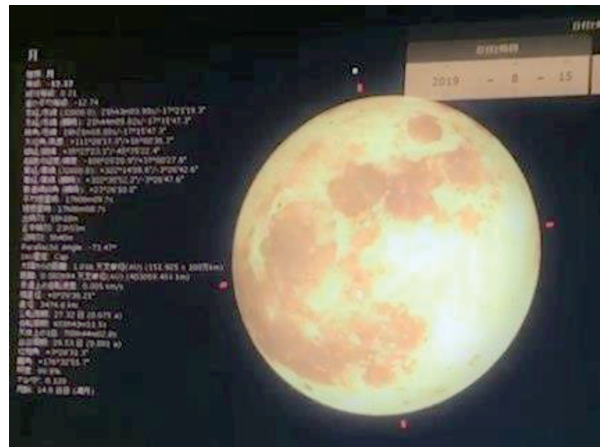


図4 映し出された満月の映像

#### エピソード②

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

スクリーンに土星の環や衛星がはっきりとうつつた時

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

「あのさ~、土星の環は、氷の小さな石がたくさん集まって環になっているだよ」と5歳児B君。うなづきながら聞いている実践者を見た一同からは、「へえ~っ、そうなの」という声が漏れる。土星の衛星について説明をすると、B君が、「僕は、他の星のことも知ってるよ。水星は太陽に一番近い惑星です。金星は…」と話を始め、一同、「おおう」と、最年少者の天体知識に感心する。

##### ◆手ごたえのポイント

全体が一つになり、「へえ~っ」と「おお~う」の連続で一人一人の心が耕され、知っているようで知らなかったことが明らかになっていく気持ちよさを味わっている。

#### エピソード③

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

解説の中で、「上之山オリジナル星座の絵」で黄道12星座を説明

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

ほとんどの参加者が、自分の星座の時に元気よく「はい、私、それです」と手をあげるなどして盛り上がりを見せた。12星座が、太陽の通り道(黄道)を通っているので、東から昇り西に沈むことを天文ソフトStellariumで説明すると、「へえ、そうなの。東から昇ってくるの?」というお母さんの驚きの声。「僕の星座のうお座はどれ?」という5歳児B君の質問には、Stellariumの映像(星座線と星座名入り)で神話も交えて、「今夜の3時に空高く出ています」と説明した。

##### ◆実践者としての手応え

言葉だけでは頭の中でイメージできないことも、画像で説明することで理解が進む。

## エピソード④

## ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

一番温度が低いのは何色の星でしょう?のクイズで

## ◆参加者の反応(実践者の観察から)

4 択の答え「青・白・黄色・赤」に散らばりがあり、「正解は赤です」で「わ~~~~っ」と盛り上がる。そして、すかさず赤い星である「アンタレス」を主星に持つさそり座が今日の夜空の月の近くに見えることを伝え、Stellariumで位置を確認すると、「早く外に観に行きたい」という6年生の声。

## ◆実践者としての手応え

楽しみながら好奇心が強まる。知識を体験で確かめたい、という体験になっている。

## エピソード⑤

## ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

Stellariumで勉強しあとの観望会で、雲の隙間に月と木星を見つけた時

## ◆参加者の反応(実践者の観察から)

雲の隙間から月が見え、「本当に半分くらい、だから半月」「月の周りに大きな光の輪ができてるね」との声。木星を見つけると「嬉しい、見えた。でも、晴れている時に観たい」という声に、一同から同意する声が出る。曇り空であったため、月と木星しか見えなかったことが功を奏し、晴れた夜にはどんな空なんだろうかという好奇心が大きく膨らんだようだ。

## ◆実践者としての手応え

満たされなかった気落ちが、翌日以降、夜空を見上げる行動につながる。

2019年8月9日(金)

「星のお話&観望会」翌日

この日の天気も、8日に続き曇天。夜19時から21時は、月の出ている辺りだけは雲が途切れていた。前日の「星のお話&観望会」の余韻もあり、出会う人ごとに朝の挨拶の続きに星に関する話が付け加えられた。

## エピソード⑥

## ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

朝食時、6歳児A君が、「やぎ座のポストカード(前日に一人一枚プレゼントしたもの)」を手に、上之山に話しかけた

## ◆参加者の反応(実践者の観察から)

「ねねね、この山羊はしっぽが魚みたいだけど泳げるの?山羊は空気がないから生きていけないんじゃないの。ロケットに水と土を積んで持って行ってあげたらいい。宇宙に行くと軽くなるから、いっぱい持っていけるよ」などと話をたたみかけてくれるだけでなく、「アルパを弾きたい」というので、朝食後にその思いを叶える。彼は、アルパのボディに耳をあてて音を感じ

取り、「キレイ。宇宙みたいな感じ。山羊が歌っている感じ」と発言。

## ◆実践者としての手応え

6歳児が、宇宙にいる山羊が生きていくための方法を考えている。絵と宇宙と音楽が融合して、彼の感性を発動させた。感性を磨くことと生きるという現実を思考することの両面にスイッチが入った。

## エピソード⑦

## ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

夜に「ナイトプール」をすることになり、プールサイドでアルパ演奏中

## ◆参加者の反応(実践者の観察から)

プールで泳ぎながら空を見上げる子どもたちが「月が見えるよ〜、昨日よりも少し太ったね〜」「木星も見えるよ」「どこどこ?」と口々に発言。中でも、「すごいスピードで動いているよ」「昨日より木星と月が近くなってる」「泳ぎ始めた時と今を比べるとね、月も木星も場所が変わったね」の発言が、演奏中にも関わらず耳に入り、「雲の動き」「地球の自転」「月の公転」などを教えたい気持ちが強まった。11歳児Cさんに、「泳ぎ始めた時と今を比べるとね、月も木星も場所が変わったね」と言った根拠を聞いてみると、「同じ場所から見て、ヤシの木のどの辺に月と木星が見えるかが違っていたから」であった。前日に、月や木星の1時間ごとの動きをStellariumで見たことがこのような行動につながったのだろうか。動きとしては1時間に15度くらいではあるが、彼女は実際の夜空で、自身が考え出した観測法で確かめたことになる。しかも、ナイトプールで泳ぎを楽しみながら。

## ◆実践者としての手応え

子どもたちが自発的に空を見上げた。見るだけではなく観察や比較ができています。Cさんが、自分で観測法を見つけたことは生きる力の一つである。「泳ぎながら天体観測」という貴重な体験。



図5 ナイトプールとでアルパの調べ



## エピソード⑧

### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

プールサイドで、Eさん(5歳児A君の母30歳代)が私に話しかけた

### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

演奏の合間で、「月の下のあの星の名前はなんでしたっけ?」と尋ねてきたEさん。「木星です」「いえ、それではなくて赤っぽい…」「アンタレスです」「あー、そうでした。それが思い出せなくて。月の右の方にも小さい星が見えますね。」と、会話が進む。Eさんは前日の星のお話で得た知識を使い、関心を持って夜空を楽しんでいる様子。

### ◆実践者としての手応え

知識の定着、興味の持続を確認できた。大人も子ども同様に好奇心を持って素直に質問できている。

2019年8月10日(土)～11日(日)

「星のお話&観望会」の2日後～3日後

8月10日から実践者は、チャイルドハウスの外壁に大きな絵(2.5m×2m)を描き始めた。絵には、太陽と月も描かれており、火山(実際に近くに火山がある)からはたくさんのハートが噴出している。モチーフはネグロス島の生物たち(ウミガメ・サング・魚・水牛・さとうきび・アボカドの木・椰子の木)だ。絵を描いている場にも子どもたちがやってきて対話がはずんだ。内容は、火山を見ながら地球の歴史について、握手するウミガメと水牛を見ながら国際的なコミュニケーションについて、その他、自然環境、太陽と月(昼と夜、陰陽)のことなど、話の内容は多岐に渡った。



図6 チャイルドハウスの壁画制作中

またこの日までに、Detiに滞在しているうちの4名に、一人40～60分ずつの「未来の可能性を開く心理カ

ウンセリング」を行った。心理カードを使い、生き方について掘り下げた。(後に、あと7名の方に心理カウンセリングを行った)。

8月11日には、外部のお客様も加わってのアルパコンサートを催した。その際に、20年前に中学校のカウンセリング室で生まれた曲「空の上の光の魂たち」を歌唱。生まれたいと思って生まれてくる魂のストーリーを、ある生徒から聞いた上之山が歌にしたものだ。お客様から深い感想もいただき、あたためて、実践者自身がネグロスに滞在している意味を考える日にもなった。人類にとっての財産である「天文」に魅かれ、皆さんに伝えている理由も、音楽・絵画・心理カウンセリング・絵本朗読をする理由も突き詰めれば同じ、個人の幸せや人類の在り方や進み方を思考するきっかけを作っているのだということを、強く感じていた。



図7 演奏会の後、アルパに触れてみる女の子

天気は相変わらずの曇天ではあったが、detiで過ごす人たちの天文への関心は衰えず、8月8日以降、毎晩空を見上げている人は、少なくとも60%以上(星に関する話をしたり質問を受けたりすることで把握できる範囲)、100%であった可能性も高い。

## エピソード⑨

### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

食堂に続く談話スペースで、インターンの学生のうち2人(インターンA氏・インターンB氏)との会話時

### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

インターンの学生のからStellariumを使えるようになりたい意向があることを告げられる。「あれが使えるようになるといいですね。ダウンロードしてみて、やってみようかな」とインターンA君。「天文ソフトの名前、なんでしたっけ?面白いから出来るようになります。」とインターンBさん。インターンの学生は、ネグロス島の生活向上のための産業開発研究(農作物の商品化など)を目的として滞在するなど、国際協



力の志も強く、世界中の人とのコミュニケーション力をさらに伸ばそうとしている方々である。Stellariumの有効性や可能性という点において、その魅力を感じ取ってもらえたのだろう。

#### ◆実践者としての手応え

Stellariumのスキルを伝授してほしいという者が現れ、星空案内を伝播する意欲が実践者に生まれた。「国際協力としての天文」をあらためて考えるきっかけとなる。

#### エピソード⑩

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

食堂に続く談話スペースで、インターンやスタッフ、みなさんとの会話時

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

インターンのCさんに、フィリピンは「Zero Shadow day」を持つ国であることを伝え、大変興味を示してくれた。スタッフAさんに至っては「それを知ってすっきりした。いやあ、実は変だなあと思っていたのですよ。太陽の場所が北なのか南なのか。影のつき方も違うし、前はこっちで今はこっちとか、おかしいなあと思っていたのです。」という発言。そして、上之山からの「年に2回起こるうちの1回が、まもなく8月25日に起きるので、日時計の軌跡が一直線になる実験をすればいいですよ」との提案に、「それなら、比較対照できるように、そうじゃない日にもしておきたいですね」とインターンのBさん。

##### ◆実践者としての手応え

太陽の動きを知って、それまでの疑問が解決した心地よさの体験。ネグロスだから出来ることをみんなで楽しもうとする姿勢を感じた。

2019年8月12日(月)

#### 「星のお話&観望会」の4日後

晴れ。昼のうちから、出会う人ごとに「今日こそは星がいっぱい見えますよね」という会話がなされる。日中の青空と穏やかな海が、「今夜は星が見える」という期待を高めていたようだ。実際この日は、第2回「星のお話&観望会」が自然発生的に生まれた。

#### エピソード⑪

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

夜7時半ごろ。食堂の外、プールサイドの南向きの階段に腰かけながら

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

インターンBさんが私にこう言った。「今日、子どもたちに一緒に星を見ようと言われました。またいつかStellariumの使い方を本当に教えてください。ダウンロードはしてあります」と。上之山は「それなら今か

ら、実際に星を見ながら使い方をレクチャーするのはいかがですか」と提案し、2人だけの勉強会をすることになった。プールサイドの階段に腰を下ろしStellariumを開くや否や、子どもも大人も集まってきて9人の観望会となった。南向きなので、月・木星・土星・さそり座が実際に見える。「あ、これがあれだね」「あれがこれだね」と、実際に見える天体と画面上の天体を照らし合わせ、一つ一つ確認し、納得しながら観望会を進めることが出来た。参加者全員が活躍する中で、Stellarium伝授も、楽しく進めることができた。

##### ◆実践者としての手応え

Stellariumで映し出された天体を実際の空で探すことは、天体に詳しくなくてもできるので、全員で教え合える楽しさが生まれた。インターンBさんがStellariumを使えるようになった。

#### エピソード⑫

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

自然に生まれた第2回「星のお話&観望会」の中で子どもからの質問

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

「月は灰色なのに、どうして黄色に見えるの?」と5歳児B君。その質問の意味がすぐに理解できなかった。月が灰色というとなえ方が私になかったからである。月の石は灰色だから月の表面は灰色のはずなのという疑問であると理解し、「太陽に照らされて光っているところが黄色にみえます」と答えた。恒星と惑星、衛星の話に通じる質問であった。

##### ◆実践者としての手応え

子どもの疑問は純粹であるがゆえに、質問の意図が大人にはすぐには理解できない場合があるが、蔑ろにせずに理解することで信頼感につながった。

#### エピソード⑬

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

自然に生まれた第2回「星のお話&観望会」で私が問題を出した時

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

「月と木星は、月が大きく見えているね。本当はどちらが大きいでしょう」と出題した時、多数の人が「木星」という返答。「ではどうして、今、月の方が大きく見えているのかな」に対して、「月は地球に近いから」という返答もすぐに返ってきた。しかし、5歳児B君は、「どうして? どうして?」と理解できない様子。その時、B君の父Gさん(40歳代)は、体を使って説明を始めた。まず、B君に、「お父さんとお母さん、どちらが大きい?」と尋ね、「お父さんが大きい」と確かめた後、自分だけが遠くに行き、「おうい、今、お父さんとお母さん、どちらが大きく見えるかな〜?」と。

◆実践者としての手応え

「距離と見かけの大きさ」について、B君のお父さんがとっさにとった行動が、ユニークで素晴らしい。閃きをすぐに行動にできるくらい、心がほぐれている場であった。

エピソード⑭

◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

自然に生まれた第2回「星のお話&観望会」の中で子どもからの質問がきっかけとなり…。

◆参加者の反応(実践者の観察から)

「シリウスは見えるの?」と5歳児B君。「今は見えないけど、見えるかどうか調べてみようね。」と、Stellariumで時間を進めて調べた結果、「4時くらいに、オリオン座の三つ星を探してください。ベテルギウスとりゲル、そして、シリウスも見えるはずですよ。」と伝える。「4時に起きたら見えるんだって。起こしてあげようか。」と母Eさん。

◆実践者としての手応え

好奇心が空全体の星の動きを知る方向へと向いている。

2019年8月13日(火)

晴れ。夜に、上之山にもう一人現地のライア奏者が加わり、「ヒーリングコンサート」がチャイルドハウスで開催された。「ライアの弦は金属でできています。鉄砲の弾にならずに、楽器の弦になりました。」とライア奏者。アルパは獵時代の弓矢がルーツであることを伝え、奪い合う戦争のための「武器」ではなく「楽器」に進化したハープ2台で解け合うような音楽を奏でた。次にライアのBGMで谷川俊太郎作の絵本「せんそうしない」を上之山が朗読。その後のワークショップは、女性限定で行うという企画であったため、子どもたちと男性は、一足先に浜辺に出て天体観察などを行った。ワークショップでは、女性全員が床に寝そべり脱力し



図8 ライアとアルパの共演、寝そべる子ども

た。ライアの音色に包まれる中でお母さんのお腹の中に戻り、再び現在に戻ることをイメージできるような上之山の言葉に促されて、自分自身をゆっくりと見つめなおす30分になった。「無重力感ってこんなかなと思った。」「自分がちょっと優しく変われた感じがします。」という感想もあった。

エピソード⑮

◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

朝、食堂で、母Eさんが報告。

◆参加者の反応(実践者の観察から)

「シリウスは見えなかったんです。薄曇りで、いくつか星は見えたんですけど～よくわからなくて。明日も、早く起きてみようと思います。」

◆実践者としての手応え

早起きしてでも見たいという気持ちが行動をおこさせ、持続している。

エピソード⑯

◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

夜8時30分ごろ、庭に出ていた数人でさそり座が出ている辺りを見る。

◆参加者の反応(実践者の観察から)

「土星も見えるよ。」と11歳児Cさん。「ええ? 見えなだけで、目が悪いからかな。」と実践者。眼鏡をかけて「見えた。」と嬉しそうに言う。ただそれだけに笑いが起こる。和やかな雰囲気ではみんながつながって一つになっていることを大事にしているようである。さそり座生まれのインターンBさんは「初めて蠍の全貌をはっきりと見ました。感動です。しっばまで見えますね。すごいです。」と発言。

◆実践者としての手応え

インターンBさんが、日本でできない体験ができて感動していることをみんなで共感している。

2019年8月14日(水)

晴れ。最初の「アルパ演奏&絵本朗読会」から一週間以上が経過し、一緒に過ごしているお互いの考えや生き方を知ると同時に、一人一人の行動や心の持ち方の変化を語り合うことも日々の楽しみとなった。心理カードを使ったセッションでも、未来に向かう姿勢や方向が決まったり、意志を強めたりするワークの後、どのような変化が起きたかを知ることができたのも、滞在期間が12日間あったおかげである。

エピソード⑰

◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

夕刻の食堂で、11歳児Cさんと出会う。

◆参加者の反応(実践者の観察から)

Cさんが私にゆっくりと話かけた。「あの本、ほら、

『セルフ・セラピーな心』をね、全部読んだよ。だから、私は、上之山幸代さんのことを、全部、わかってるよ。若いころから、星が好きだったんだね〜。」と。「私の事、全部ばれちゃったか。それでは、今度は、あなたのことを私に教えてください。」「うん、いいよ。」という会話がなされた。

それまでに行われた星の解説やコンサートの後のスタッフの意見は、「Cさんの目の輝きがすごかったです。気づいていましたか。」「本当にワクワクしながら聞いているのがわかりました。」であった。

#### ◆実践者としての手応え

著書を通して「興味を持った人の生き方を知る」ということを行い、そのことを直接著者に伝える体験をCさんはした。



図9 興味深く見つめる「目」

#### エピソード⑱

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

母Eさんが上之山とインターンBさんに報告

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

「朝、また早く起きてみたら、シリウスが見えたんです。あんなに鋭くきらりと光っているのを初めて見ました。感動です。」と母Eさん。子どもに向かって、「今日も4時に起きる？」と誘う。それを聞いて、インターンBさんがStellariumで調べると、無理かもしれないということがわかった。「明日は満月。月が沈むところに太陽が昇ってくるので、空が暗くならない可能性が高いです。昨日がギリギリ、最高のタイミングでした。」「そういえば、昨日、シリウスを見た時には、月が出ていませんでした。」「昨日、早起きをがんばって良かったですよね。」という会話がなされた。

##### ◆実践者としての手応え

1日違うと空の様子も変わっていることを話題にできるほどになっている。天体観測を通して親子の関係性も良好。

#### エピソード⑲

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

夜8時頃、敷地内の庭で、東の空が見えるところに自然と集まった人々

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

実際の星を指さしながら上之山が解説。「あの十字になっているところが、はくちょう座だよ。十字の中で一番明るい星がデネブって言って、お尻なんだよ」「(ケラケラ笑いながら)見える〜〜。」「そして、あの明るいのが織姫、こと座のベガです。そして、あれが、彗星、わし座のアルタイル…。」椰子の木の向こうに見える大三角に、一同、うっとりしている様子。安心してゆっくりとした時間の流れを感じているような雰囲気。

##### ◆実践者としての手応え

七夕伝説で有名な織姫と彦星を、フィリピンの空でも見ながら、ロマンティックで心穏やかな時間を共有できた。



図10 庭に集まる人々 指さす実践者

2019年8月15日(木)

晴れ。満月。「初盆の儀式」でアルパ演奏。

副校長の母であり、開設者であったKさんの初盆の儀式が行われた。Detiの談話室に約30名が集った。アルパ演奏の「アメイジンググレース」で始まり「アベマリア」で締めくくるまで、一人一人のお祈り(日本というお焼香)も含め約1時間、厳かな雰囲気で行われた。その後、全員で浜辺に出てギター伴奏で歌ったり踊ったり、風や波と戯れ空を感じたりした。

#### エピソード⑳

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

海辺で沈みゆく太陽を見つつ昇りくる満月を待っている時

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

8月8日に行った星のお話で、8月15日は満月にな





図11 沈みゆく太陽

ることを確認していたので、数人は、西に沈んでゆく夕日を味わいながら、東の空から満月が昇ってくるのを待っていた。その中のお母さん二人に「今日は、太陽と月が、地球をはさんで真反対の位置にあります。だから、月全体に太陽の光が反射して満月に見えるんですよ」と身振り手振りをつけて解説した。すると、「満月になる理由がやっとわかりました」「学校でやってたときは分からなかった」と、口をそろえてDさん(母30歳代)とFさん(母40歳代)。

◆実践者としての手応え

月の満ち欠けを理解できていないままの大人が多いが、話しかけた二人がそうであることが分かった。子どもの頃に分からなかったことがわかって、嬉しいという気持ちが伝わってきた。

エピソード②①

◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

夜、食堂に続く談話スペースでインターン学生A君との会話

◆参加者の反応(実践者の観察から)

インターンA君と談話スペースで2人になる機会を得た。落ち着いて話ができる雰囲気だったので、「アルパを聞いてもらったり、星と一緒に見たりしてきたけど、A君は、音楽や天文に、どんな思いを持っているのか教えてほしい」とお願いをした。するとゆっくりとではあるが途切れることなく、一気に話を聞かせてくれた。

「星が綺麗に見える場所ってというのは、たいてい余計なものがない、自然な音楽が聞こえてくる。風が吹いたり…。ここでも、今、波の音が音楽のよう。あの、思い出した事を言ってもいいですか。僕は街の灯りなどない山の奥に行ったとき、風が吹いたり鳥の鳴き声が聞こえたり、自然の音がたくさんで、それに本当に星が美しくて…。その中にいると、『自分はちっぽけだなあ。この広い宇宙の中で』と思ったんです。葉っぱが擦れ合う音や虫の声を聞くと、“自分も動物なんだなあ”とも。実はクラシック音楽が大好きなんです。音って物理的には波動で、それを体感している。それだけなのに、音楽を聴いている時に『これでいいのだ。』

自分という人間がこの世に存在しているだけでOK』と思えるんです。星を見ててもそんな感じになります。こんなんでも答えになっていますか。」

◆実践者としての手応え

真剣ではあるが、評価も批判もない雰囲気の中で、A君が星や音楽をどのように好んでいるか、彼の思いの一部であるにしても、真髓の意見を聞くことができた。

2019年8月16日(金)

エピソード②②

◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

宿泊棟、部屋を出たところの共用スペースで

◆参加者の反応(実践者の観察から)

隣の部屋で過ごしていたFさん(母40歳代)が、こう言った。「一緒に過ごせて、本当にいろんな体験ができて良かったです。次にまたここに来ることはありますか。それに合わせて来たいです。」

◆実践者としての手応え

母Dさんにとって、一緒に過ごした日々が有意義だったと感じている気持ちが言葉になった。

エピソード②③

◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

夜プールサイドにメインスタッフ3人(校長・教頭・Cさん)と上之山が集合

◆参加者の反応(実践者の観察から)

珈琲など飲み物を片手に星を見ながら、くつろぎタイム。アルパのボディに耳をつけて音を楽しみながら月を見るスタッフCさん。Cさんは、アルパでアメイジンググレースを演奏できるように練習を始めた。

◆実践者としての手応え

星空とアルパの音色で、心を開放してくつろぐ時間に深いつながりを感じ合う体験。アルパを引き継いでくれる人も出現。



図12 アルパで初めての「アメイジンググレース」

2019年8月17日(土)

#### エピソード②④

##### ◆タイミング(どんな場面で、どんな時に)

帰りの空港で、待ち時間に。

##### ◆参加者の反応(実践者の観察から)

お絵かきタブレットに、迷うことなく何かを描き始めた。描く様子をじっと眺めていた私に、彼はこういった。「乙姫と彦星だよ」。上之山は、「織姫でしょ」と正すことはせずに、「じゃあ、これが天の川ですか」と尋ねると、当然でしょという顔つきで「そうだよ」と答えた5歳児B君。

##### ◆実践者としての手応え

B君は、Detiの庭で見た夏の大三角をしっかりと記憶していて絵にすることができた。促されて描いたのではなく、自然にすらすらと絵にした。



図13 お絵かきタブレットに天の川

#### 4 印象的な事例を成立させた環境

24事例が、人々に広い視野を与え、個人の生き方や人間の在り方を思考するきっかけとなるような印象的な事例となったのは、どのような環境が影響したのか、考え得ることがらを以下に述べる。

##### 7つの環境

##### 【4つの物的環境と3つの人的環境】

- ・ 地域・風土の力
- ・ 場(建物・カリキュラム)の力
- ・ 時(時期・期間)の力
- ・ ツールが持つ力
- ・ スタッフ(依頼者)の力
- ・ 参加者の力
- ・ 実践者の力

#### 【4つの物的環境】

##### ①地域・風土の力

ネグロス島の緯度は、北緯約9度なので北極星の高度が9度と低い。その北極星を中心に天体が回転するように見えるので、日本とは天体の通り道が違ったり、見えない天体(南十字星など)が見えたりすることを体験できる。天の運行上、特殊な環境ともいえる「ZERO Shadowday(太陽が頭の真上を通る日)」を持つことも好奇心をかき立てる。周辺には強い光を出す建物などがないので光害が少なく自然をゆったりと感ずることができるので、星を見るための好条件な地域である。

##### ②場(建物・カリキュラム)の力

ネグロス島の中でも治安のよい場所に建てられた個人の別荘だったところに教室を建て増した学校なので、敷地内の広い庭やプールでも安心して過ごすことができる。緊急時にも対応できる夜間警備員を配備しているので、夜の観望会も安心安全な中で行える。

学校としての生活規則や生活時間はきちんと守られるが、活動内容は自由度が高く、個性が発揮できる。自由時間には自発的な行動ができるような環境づくりがなされている。

##### ③時(期間・時期)の力

2週間を共に生活していたので、毎晩、一緒に空を見上げ、語り合うことができた。一人一人が何に興味を持ち、何を考えどう変化していくのかが実践者にもよく伝わった。「星のお話&観望会」の翌日以降1週間が薄曇りか晴れ(7日間続けて観望できる確率は約0.3の7乗と極めて低いはずだが)であったのは有り難かった。また、月と木星の関係がよくわかる期間であり、1日たつごとにそれらが12度くらいずつ離れていく様子に気づく楽しみがあった。

##### ④ツールが持つ力

天文解説のツールとして使用した天文ソフトStellariumは、地球上のあらゆる地点からの空の様子を映し出せるだけでなく、過去と未来のどちらにも設定可能なので、まさに時空を超えた星空を体験することができる。このソフトを取り入れたことは、参加者の興味喚起、理解促進に大いにつながった。実際の星空を観る前にStellariumを使ってまず調べ、実際に観た後に湧き起こる疑問をStellariumで確かめる、というように星空観察の前後に必要な情報を得ることができる。また、Stellariumを伝授することは、星空案内を広げることにつながると実感した。

#### 【3つの人的環境】

##### ①スタッフ(依頼者)の力

校長、副校長は共に、教育学研究の専門家であり、

国際協力機構青年海外協力隊の理科隊員のOB、OGである。ザンビア共和国、インド、サモアなど、途上国における教育や児童保護や学生の指導など国際協力の経験と実績が豊富で、国際親善の意識を高く持ち続けて人間教育を探究している。これが今回の実践の神髄に流れる思想であり根幹の考え方である。

また、現地イベントスタッフと実践者が渡航前から連絡を密に取りながら計画を進め準備することが実践の質を高くした。

フィリピン人スタッフ約30名に関しては、英語教師約20名は教育大学などで学んだ教育の専門家、庭師1名、料理人2名、夜警1名、ハウスキーパー数名、運転手2名は技術が高く、大らかさと優しさで人々を迎え入れる人間性が備わっている。

## ②参加者の力

親子留学生もインターン学生も意欲的で挑戦的である。成長しよう・変容しよう・役に立とうという意思を持っているので、「知る・感じる・考える」、「人と関わる」、「自分の器を広げる」などを目的として、限られた時間(人によって違うが、2週間～3カ月間)を有効に使っている。今回は、宇宙好きの子どもの存在が雰囲気明るくし、全体の興味を喚起するという好影響を生んだ。

## ③実践者の力

実践者が天文以外に、アルバ演奏・絵画・心理カウンセリング・朗読などの引き出しを持ち、複数の役割を担ったことが、実践内容を充実させたと考えられる。それらを臨機応変に天文案内と融合させて目的に向かうことができたからである。

## 5 おわりに

第4章で示した7つの環境の1つに「実践者の力」がある。実践者が多方面に力をつけ、あるいは、すでに持っている力をうまく融合させる方法を編み出すことは、星空案内の可能性を大きく広げるために有効なことである。

今回の実践は、日常生活から離れた日々の中で、精神的によみがえったり一段高いところに行ったりできる体験を作った例ともいえるが、実践者がコーディネーターとして働く上で役立ったと考えられる経験を3つ挙げる。

1つめは、学校心理士としてのカウンセリング経験である。実践の期間中、カウンセラー的な意識をもって言葉がけをするのはもちろんのこと、今回の実践で使った心理カードは、公立中学校の「心の教室」で6年半使ってきたものである。その「心の教室」には常にアルバが置かれていて、上之山は、カウンセリングの際にアルバ演奏をする学校心理士であった。

2つめは、これまでの音楽活動、絵画表現である。上之山は、アルバ演奏で宇宙を感じるステージを演出したり、星などをモチーフに油絵を描き続け個展したりしてきた。今回のような実践の場で、音楽や絵画で参加者と触れ合うことは、参加者の精神的な変化を促すことにつながった。アーティストとしての力、また、クリエイターとしての力が、今回の実践で大いに役立ったと言える。

3つめは、海外体験である。役割を持った滞在型のもが多く、地球規模で物事を考える機会も多かった。国際協力機構「海外開発青年、日本語教師」として南米パラグアイに滞在(1988～1991)の他、東南アジアではバングラデシュの孤児院で孤児と関わるために滞在、ブルネイ共和国オリンピック選手団に日本語指導するために滞在などがある。これらの体験が、今回のような「海外で行う滞在型星空案内」を実践し「文化と社会に力を与える星空案内の環境」を考察する上で大いに役立った。

国際天文連合(IAU)「戦力計画2020-2030」の12の方向性で、「文化と社会」分野において「人類学」「哲学」「インスピレーション」「教育」の方向性もはっきり示されている。天文が社会に貢献する多様な方向性に注目していきたい。

## 参考文献

国際天文連合(IAU)「戦略計画2020-2030(2018)」

URL

IAU Strategic Plan 2020-2030 :

<https://iau.org/static/education/strategicplan-2020-2030.pdf>

「IAU戦略計画2020-2030」日本版 :

[https://tenkyo.net/wp-content/uploads/2019/05/iau-strategic\\_jp\\_05.pdf](https://tenkyo.net/wp-content/uploads/2019/05/iau-strategic_jp_05.pdf)

## 謝辞

「Deti」の創設者 高橋きよみ氏(2019年2月フィリピンで逝去)に深く感謝する。彼女の生前中に赴くはずであった「Deti」が今回の実践研究の場となったこと、彼女の意志が引き継がれ強く息づいていたことを伝えたい。校長の中里春菜氏、副校長の高橋大海氏、そして、出会ったすべての人々の生きざまに触れることができたことに心から感謝する。

## 付録

最後に、実践実現の経緯を紹介する。

高橋きよみ氏は上之山のアルバレッスン生であった。上之山は、彼女の息子である高橋大海氏から、「ネグロス島で初盆のお祈りのアルバ演奏」の依頼を受けた。新月、満月ごとに月に祈ることを好んでいた彼女のために、2019年8月15日の満月の日が選ばれた。当初は「お祈りのアルバ演奏」のみが渡航目的であったが、海外留学生親子に有意義な体験を提供したいという高橋大海氏の思いに上之山が共感し、滞在期間を12日にして計画を立てたことで今回の実践が生まれた。